

学生の辞書利用の実態についての小調査 2

—言語能力向上への糸口をさぐって—

大塚みさ

日本語コミュニケーション学科助教授

1. はじめに

本稿の主たる目的は、学生の辞書利用の実態を調査し、それらが個々人の言語能力の向上にいかに結びつきうるかを模索することにある。

大塚（2002）では Hartmann（1999b）で実施された調査項目を用いて短大生の辞書利用状況と意識を調査し、今後の調査に用いる質問項目を検討している。しかし、この3、4年の電子辞書のさらなる機能向上と普及は学生の辞書利用状況にも少なからぬ影響を与えており、その後の調査に際しても質問項目の再検討と修正の必要性を感じつつある。

一方で、大学生を含む若い世代の日本語力の低下について漢字表記の誤り、語彙量の乏しさ、慣用句・ことわざの誤解などを例としてしばしば話題にされている¹⁾。誤字・脱字についての意識とその対策については大塚（2002）でも取り上げているが、その他の点についても同様の調査が必要であろう。

そこでまずこの2点に着目して質問項目の追加と修正を行った上で改めて調査を実施し、辞書の利用が個々の言語能力の向上にどのように貢献しうるかを模索する。

以下、2章では今回の調査概要を示し、3、4章において調査結果を2002年の調査結果と比較しながら分析する。5章では辞書利用が言語能力向上にもたらす効果の可能性を探る。

2. 2005年調査の概要

前述の通り、大塚（2002）は Hartmann（1999b）の調査項目を元にした調査項目によってアンケート調査（以下「2002年調査」）を実施し、今後の調査項目を検討した。今回の調査（以下「2005年調査」）では、さらに電子辞書の利用および文字表記と語彙量などの言語能力への意識に重点を置いて調査項目の追加と修正を行っている。調査実施日、調査対象および調査項目の構成は以下の通りである。

調査実施日：2005年7月11日(月) および12日(火)

調査対象：日本語コミュニケーション学科1年生

調査項目の構成：

I 辞書に関する質問

- (1) 辞書との関わり
- (2) 辞書利用の実態
- (3) 辞書・辞書利用に関する意識

II 言語意識に関する質問

- (1) 漢字表記
- (2) 語彙量

Iについては3章で、IIについては4章で調査結果と考察をまとめる。

3. 調査結果分析 I : 辞書に関する調査項目

3.1. 辞書の所有に関する質問事項

辞書の所有に関する質問項目は、2002年調査と同様に入手時期を尋ねた項目と所有する辞書の種類および冊数を尋ねた項目との2種類を設けている。前者については2002年調査（「初めて自分の辞書を手に入れたとき」について「それはどんな辞書ですか」という形で記述）とは形式を変えて、辞書の種類別（国語辞典、専門語辞典、英和等のバイリンガル辞典、シソーラス（類義語辞典）古語辞典、百科事典、その他）および媒体別（冊子、電子）に入手時期を記入させている。これらのうち回答数の多いものだけを以下の図1に示す。なお、形式の異なる2002年調査との比較はここでは行わない。

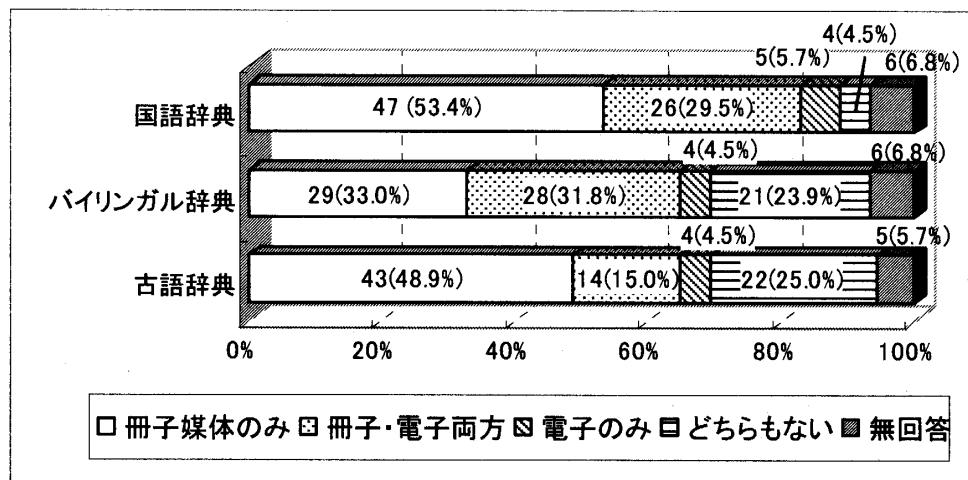


図1 辞書の所有について：辞書の種別

図1に元データの数値も適宜加えながら、以下にまとめる。

- 国語辞典の所有率（約90%）は、バイリンガル辞典、古語辞典の所有率を20pt程度上回る。

- バイリンガル辞典と古語辞典では所有者数（61人）は等しいものの、媒体別の内訳には大差がある。バイリンガル辞書所有者はその半数以上（32人）が電子辞書を所有しているのに対し、古語辞典はその約70%（43人）が冊子媒体だけを所有している。
- 冊子媒体のみ所有するという回答は、国語辞典と古語辞典とでほぼ重複しており（34人）、そのほとんどが電子辞書を所有していない。3種類すべてを冊子媒体だけで所有するという回答は23人であり、（無回答も含めて）全体の約4分の1に相当する。
- 国語辞典とバイリンガル辞典の電子辞書所有者はほぼ重なっており、そのうちの数名が古語辞典搭載の電子辞書を所有している。

表1は当該辞書を持っているという回答を入手時期別にまとめたものである。

入手時期 種別	小学校	中学校	高校	短大	不明	計
国語辞典（冊子）	37 (50.7%)	23 (31.5%)	4 (5.5%)	1 (1.4%)	8 (10.9%)	73 (100%)
国語辞典（電子）	0 (0.0%)	5 (16.1%)	22 (70.9%)	2 (6.5%)	2 (6.5%)	31 (100%)
バイリンガル辞典（冊子）	9 (15.8%)	37 (64.9%)	6 (10.5%)	0 (0.0%)	5 (8.8%)	57 (100%)
バイリンガル辞典（電子）	0 (0.0%)	8 (25.0%)	21 (65.6%)	2 (6.3%)	1 (3.1%)	32 (100%)
古語辞典（冊子）	1 (1.8%)	18 (31.6%)	34 (59.6%)	0 (0.0%)	4 (7.0%)	57 (100%)
古語辞典（電子）	0 (0.0%)	0 (0.0%)	13 (72.2%)	3 (16.7%)	2 (11.1%)	18 (100%)

表1 辞書の所有について：入手時期

表1を辞書の種類別に見していくと、以下のような傾向がとらえられる。

- 短期大学入学後辞書を入手したという回答は非常に少なく、特に冊子媒体の辞書を購入したと回答したのは1人のみである。
- 冊子媒体の国語辞典の入手は小学校在学中が約50%、中学校在学中がそれを追つて約30%である。一方、電子媒体の国語辞典の入手は高校在学中が約70%である。国語辞典を搭載した電子辞書が今回のアンケート対象者の高校入学前後から普及したということも一つの理由であろう。
- バイリンガル辞典は、小・中学校在学中に冊子媒体を、そして高校在学中に電子媒体を入手するというパターンが最も比率が高い。一方、高校入学以降は冊子媒体の辞書を入手するという回答が少ない。
- 古語辞典は冊子、電子とも高校在学中に入手される比率が高いが、電子辞書よりも冊子媒体で所有される比率が高い。古語辞典を搭載している電子辞書が少ないためと推測されるが、古語辞典は横書きでは読みにくいという理由でそれを選ばなかつたとも考えられる。

次に、購入する辞書選定の条件についての質問項目を見ていく。表2は、「最近買った冊子媒体の辞書について、それを選んだ理由は何ですか?」という質問に対する回答（複数回答可）である。無回答数33を除外し、最近冊子媒体の辞書を買った55人についての結果を2002年調査と比較して以下に示す。

	2005年	2002年
(中・高・大・塾等) 教師の アドバイス	30 (54.5%)	15 (41.7%)
友だちの薦め	3 (5.5%)	4 (11.1%)
親・きょうだいの薦め	3 (5.5%)	-
店頭でみてよいと思ったから	18 (32.7%)	18 (50.0%)
広告をみてよいと思ったから	1 (0.2%)	-
その他	5 (9.1%)	11 (30.6%)

表2 購入辞書選定理由

- 教師のアドバイスに従って購入するという回答が13.8pt増加する一方、自分で選んで購入するという回答は17.3pt増加している。教師についてはその半数が高校の教師である。この点に着目して教師がアドバイスをする際に辞書の規模や性格を教示する、あるいはパンフレットやマニュアル等の資料をきちんと読ませるなどの指導も加えられれば、ある程度の効果を期待できるであろう。
- (2002年調査の「その他」は「家族の薦め」を含むが)家族や友人の薦めに従って購入するという回答にはあまり変化がない。
- さらにいずれの調査でも「その他」には「学校で指定教材として購入」が含まれることから、辞書選択を自分自身で行わない傾向にあるといえる。

さらに、冊子媒体の辞書を買うときに優先するポイントについて「収録語数、価格、携帯性、用例数、知名度、その他」をあげ、優先順位の高い順に6から数字を記入させている。その数字の平均値を2002年調査の結果と並べて表3に示す。

	2005年	2002年
収録語数	4.83	4.50
価格	4.12	2.97
携帯性	3.20	4.50
用例数	3.80	2.97
知名度	3.40	0.00
その他	2.00	1.92

表3 辞書購入時の優先点

- 依然として収録語数が最も高い優先順位を保っている。
- 2002調査に比べて、今回の調査では価格の優先順位が高くなっている。理由は明確ではないが、多数の辞書を搭載した電子辞書の影響も考えられる。
- 2002年調査で収録語数と並んで第一に優先されていた携帯性は、今回は優先順位が低くなっている。電子辞書という携帯性に優れた辞書の普及により、冊子媒体の辞書の携帯性は逆に問われなくなってきたとも考えられる。

3.2. 辞書利用に関する質問事項

今回は国語辞典を引く頻度を媒体別に質問している。無回答（電子辞書については「電子辞書を持っていない」が大半）を除外した回答数を元に作成した図を以下に示す。

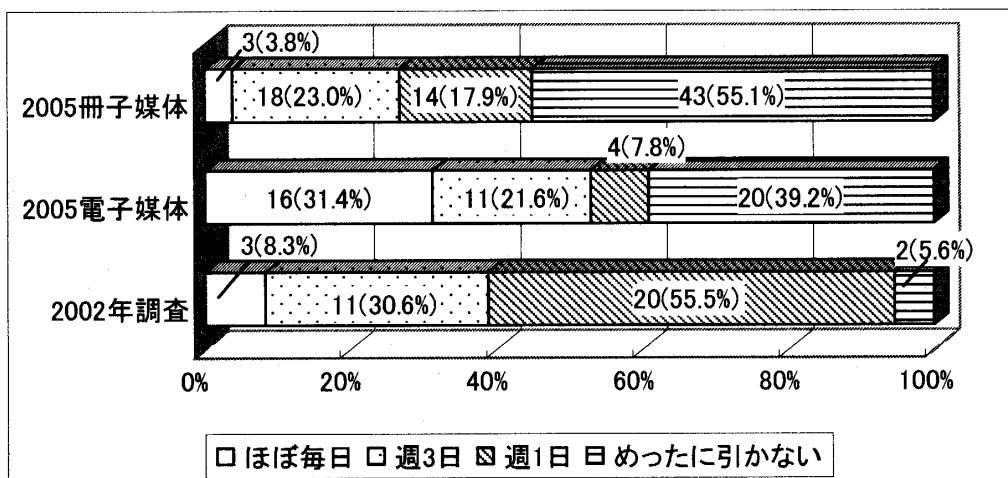


図2 辞書利用頻度

図2からとらえられる傾向は以下の通りである。

- 辞書の媒体の違いは明らかに利用頻度に影響を与える。

電子辞書の国語辞典を「ほぼ毎日」引くという回答は全体の約30%を占め、「週3日」と合計してほぼ半数に相当する。一方冊子媒体では「ほぼ毎日」は5%に満たず、「めったに引かない」が半数を超える。

- 電子辞書は持っていても国語辞典はあまり利用しない学生もいる。

電子辞書の国語辞典を「めったに引かない」と回答したうちの数名は「電子辞書に搭載された辞書のどれをどのくらい使うか」という別の質問においてバイリンガル辞書（英和、和英辞典）を「週1回」または「たまに」引くと答えている。

- 2002年調査と比較すると、明らかに辞書の利用頻度は下がっている。

辞書を引く目的については2002年調査とは大幅に異なる方式で質問しているため、ここでは今回の調査結果のみ提示する。国語辞典を引く目的について頻度の高い順に「10~1」の番号を記入させ、その平均値を算出した。それを高い順にならべたのが以下の表4である。ここではいわゆ

る「発信」(表現)的な言語活動と「受信」(理解)的なそれとを区別して考察するため、主に前者に関わるものに網掛けを施している。

1	ことばの意味を調べるため	7.85
2	漢字の読み方を調べるため	7.43
3	ことばの使い方を調べるため	6.79
4	漢字の使い分け (ex. 「計る」「図る」) を調べるため	6.30
5	ことわざ・慣用句等の意味を調べるため	5.69
6	漢字の字形を調べるため	5.27
7	送りがなを調べるため	5.23
8	語の同義語や類義語を調べるとき	4.96
9	単語の語源を調べるとき	4.00
10	その他	2.90

表4 国語辞典を引く目的

- 一般の日本人ユーザーが辞書を引くときの目的として沖森卓也 (1994) が掲げている4項目は、今回調査においては1、4、6、7位に分散している。
- 「漢字の字形を調べるため」の順位が低いのは、携帯電話の文書入力機能で漢字変換して調べるという手段に代替されるためと推測される。この傾向は既に2002年調査でも見られていた。
- 「発信」的な言語活動に関わる事項は比較的上位に位置している。特に「ことばの使い分け」「漢字の使い分け」のための辞書利用が多い点は注目に値する。

辞書に関するその他の質問項目については、以下に分析結果を簡単にまとめる。

- (1) 「辞書を引いたけれども必要な情報が得られなかつたことの理由」
 - 2002年調査と比較すると「(自分の) 辞書に関する知識不足」が減少し、「辞書の掲載情報不足」が増加している。冊子体辞書ではユーザー自身が主体となって当該語に関する情報を探す必要があるが、電子辞書では見出し語(の一部)さえ入力すれば情報が提示されるといった錯覚があるのかもしれない。
- (2) 「辞書を引くことの評価」(複数回答可)
 - 2002年調査と比較すると「楽しい」が7.4pt増加し「退屈だ」が11.4pt減少しているが、それ以上に「価値がある・有益だ」が24.4pt減少している点が目立つ。これらの背景に電子辞書を引く機会の増加があると仮定すると、「電子辞書は誰にでも簡単に引けて楽しいが、その分価値も下がっている」という意見の妥当性が感じられる。

(3) 「以下の状況で国語辞典が手元にないときの対処法」(複数回答可)

- 「漢字表記が分からないとき」の対処法は、「携帯電話で変換」(87.3%)、「パソコンで変換」(12.7%)、「推測で書いておく」(7.6%)、「仮名表記する」(1.3%) の順である。2002年調査(選択肢:「携帯電話で変換」「パソコンで変換」)と比較すると「パソコンで変換」が15pt減少している。
- 「ことばの意味がわからないとき」の対処法は、「周りの人に聞く」(57.7%)、「推測する」(37.2%)、「インターネットで用例を検索する」(14.1%) の順である。2002年調査(選択肢:「周りの人に聞く」「用例検索」)と比較すると「インターネットで用例を検索する」という回答が11pt増加している。

(4) 「あることを表現するのに最も適したことばが思いつかないときの対処法」(単一回答)

- 「周囲に聞く」(36.4%)、「他の単語・表現で置き換える」(31.8%)、「辞書をめくって適当な語を探す」(30.3%) の3種類に、ほぼ均等に分かれている。「類義語辞典などを引く」と答えたのは1人のみであり、数種の電子辞書が搭載している日本語の類語辞典はまだ短大生に十分に活用されるには至っていないことが推察される。

3.3. 電子辞書に関する調査項目

ここでは、電子辞書とその利用に関する意識調査の部分をまとめて提示する。以下は、電子辞書を使うことによる影響について「◎強くそう思う」「○そう思う」「△そうかも知れない」「×そう思わない」を記入させ、その結果を数値化して数値の高い順にならべた表である。網掛け部分はプラス面での影響である。

1	2.47	簡単に引けるので辞書を引く頻度が高くなる
2	2.44	携帯できるので辞書を引く頻度が高くなる
3	1.85	冊子媒体の辞書を引く技術が低下する
4	1.75	逆引き等いろいろな機能があるので、ことばに関する関心が深まる
5	1.49	搭載辞書を拡張する機能があるので、辞書を引くことに主体的に関わることができる
6	1.20	搭載された辞書の規模を意識しないため、辞書に対する正しい認識ができなくなる
7	1.16	当該の見出し語の周辺の語(および語釈)を見る機会が減り、自分のボキャブラリーに影響をおよぼす
8	0.73	スクロールするのが面倒なので最後まで語釈・説明を読まなくなる

表5 電子辞書を使うことによる影響

- 電子辞書の簡便性と携帯性が1、2位を占める。これは図1で辞書の利用頻度を冊子体と電子媒体とを比較した結果にも裏付けられている。
- 1、2位の数値からは離れているが、3位は「冊子媒体の辞書を引く技術が低下する」という回答である。簡便に引ける電子辞書を使い慣れてしまうことへの罪悪感はことばへの関心等よりも上位に取り上げられていることになる。
- 4、5位にあげられた逆引き機能や拡張機能は、電子辞書をある程度活用できていなければ理解しがたいものである。しかし先に示した利用頻度の調査結果からは、多数の学生が電子辞書の諸機能を使いこなしているとは考えにくい。よって、これらよりも順位の低い6～8位のデメリットへの認識の低さが危惧される。

電子辞書については、このほか「電子辞書の使い心地、感じられる冊子媒体辞書との差」についての自由記入欄を用意している。電子辞書のメリットに関する記述は、「冊子媒体よりも辞書を引く機会が確実に増えた（冊子媒体は引くことさえ面倒）」「複数の辞書搭載・関連語ジャンプでいろいろなことばを知ることが出来る」などをはじめ、その携帯性、簡便性および多機能性についてのものが中心である。

一方、デメリットについては、「ぱらぱらめくってみられない」「楽さは電子・楽しさは紙」といった辞書の一覧性に関する記述が多い。さらに、校正技能を学んでいる出版編集コースの学生は「(JIS 規格準拠の) 電子辞書は漢字の正確さは劣る」と述べている。また、「古い機種だと機能が少ない」という意見は、電子辞書の買い換え時の難しさを示唆しているのかもしれない。

4. 調査結果分析Ⅱ：言語意識に関する調査項目

4.1. 漢字表記について

誤字脱字に関する意識調査は、2002年、2005年調査に共通する質問項目である。文章を書くときに自分は誤字や脱字が多いと思うかどうか、および誤字脱字を防ぐための対策についての回答を、大塚（2002:23-4）と同様の形式で以下にまとめる。

誤字・脱字	対策	2005年		2002年	
		あり	なし	あり	なし
多い	あり	17	(19.3%)	14	(38.9%)
	なし	31	(35.2%)	6	(16.7%)
	無回答	2	(2.3%)	0	(0.0%)
少ない	あり	6	(6.8%)	9	(25.0%)
	なし	16	(18.2%)	6	(16.7%)
	無回答	5	(5.7%)	0	(0.0%)
無回答		11	(12.5%)	1	(2.7%)
計		88	(100.0%)	36	(100.0%)

表6 誤字・脱字の意識と対策

- 誤字脱字の意識そのものには大差は見られない。しかしながら対策の有無という観点から見ると、その結果は逆転している。2002年には誤字・脱字の多少に関わらず「対策あり」が63.9%であったのに対し、2005年は「対策なし」が62.3%である。
- 具体的な対策としてあげられているのは、「頻繁に辞書を引くようにする」、「漢字検定に臨むなど漢字の練習をする」、「書いた後に見直しをする」などであり、2002年調査とほぼ同一である。さらに、「携帯電話で変換して調べる」という回答も見られる。

4.2. 語彙量について

語彙量に関する意識調査は、今回は新たに追加した質問項目である。

語彙量	対策	回答数	(%)
平均より豊富	あり	4	(4.6)
	なし	1	(1.1)
	無回答	2	(2.3)
平均程度	あり	15	(17.0)
	なし	23	(26.1)
	無回答	8	(9.1)
平均以下	あり	7	(8.0)
	なし	14	(15.9)
	無回答	3	(3.4)
無回答		11	(12.5)
計		88	(100.0)

表7 語彙量についての意識と対策

- 自分の語彙量を判断する根拠としては、「(レポートなど) 書き物をしているとき」に「すらすら書けない」「辞書が手放せない」および「友人あるいは友人以外(の大人)と話していて」といったことばの「表現」「発信」時に実感するという回答が、「(新聞や本を) を読んでいるとき」といった「理解」「受信」時よりも多く見られる。書きことば、話すことば両面において表現力が低下していることを裏付ける結果といえる。
- 記入された具体的な対策には「本を読む」「新聞を読む」が最も多く、「辞書を引く」「テレビ・ラジオを視聴する」がそれに次ぐ。「ものを書く」は1件のみである。つまり、発信的な言語活動を通して語彙量を増やすという発想はされにくいことがうかがわれる。

5. 辞書利用と学生の言語能力・言語意識向上の可能性

3、4章で提示した調査結果を踏まえて、辞書への意識、積極的な利用がいかに学生の言語意

識、言語能力の向上に貢献しうるかどうかについて追究したい。

著者はある担当科目において1週間の辞書参照履歴を作成する課題²⁾を提出させた。辞書の参考例としてあえて「携帯電話で漢字表記を調べる」も含めておいたところ、多くの学生が非常に高い比率でこれに頼っていることが明らかとなった。さらには「期待通りの結果が得られなかつた」ケースとして小学校で習うはずの音訓から成る熟語について「漢字が読めなくてどうしても引くことができなかつた」という報告がみられたことから、「表現」「発信」時だけでなく「理解」「受信」に際しても辞書を十分には活用できない学生もいることが推察される。

携帯電話の漢字変換機能で漢字表記を調べることによって、確かに誤字・脱字は減少するであろう。しかし、以下のようなデメリットも生じうる。

- 変換できない熟語もある。機種により搭載辞書が異なるが、文章語的なことばが収録されていないために漢字変換はできない場合が少くない。
- 画面の解像度が良くなっているものの、使用しているフォントによっては表記が正確に表示されない場合もある。
- 電子辞書は一覧性という点で冊子体辞書に劣るもの、少なくとも当該語の意味用法等は目に入るはずであり、それが未知語であれば語彙量の増加につながる。しかし、携帯電話で変換するだけでは漢字表記と送りがな以上の情報を得ることができない³⁾。

しかしながら、常に冊子媒体の国語辞典を持ち歩くように指導することは現実的ではない。そこでキーを握ることになるのが電子辞書である。しかし国語辞典の観点からみると、電子辞書にもいくつかの留意点が指摘できる。

- 国語辞典も搭載されたようになったものの、電子辞書においては英和・和英といったバイリンガル辞典が主役である。メーカーのカタログが掲げる電子辞書の種別に「英語専門」「英語強化」「外国語」などはあっても「国語専門」は（少なくとも手元の2社のカタログには）見あたらず、あったとしても辞書の種類は英語系のそれをはるかに下回る。また次で述べるように電子辞書に搭載される国語辞典の種類は少ないため、結果的に電子辞書を選ぶ際の対象は主にバイリンガル辞典となる。
- 国語辞典として搭載されている辞書はメーカーを問わず『広辞苑』がほとんどである。これはいわゆる中型国語辞典（倉島 2002：96）に分類され、「『国語+百科』辞典という性格をもつ」（倉島 *ibid.*）どちらかといえば読み解用の辞典である。あるメーカーの高校生モデルはいわゆる小型国語辞典に分類される『明鏡国語辞典』と『広辞苑』を搭載し、表現用・発信用には前者が、難解語に遭遇したときには後者が有用であることをパンフレットで説明している。中学生用モデルにのみ『明鏡国語辞典』を搭載しているメーカーもある。大学生向けモデルにも小型国語辞典を搭載して表現用に活用することを促せば、語彙量や表現力向上への糸口ともなるのではないだろうか。
- 携帯性という魅力の裏には、電子辞書に搭載された辞書の姿が見えにくくなるという弊害が潜んでいる。つまり、辞書がその規模や性格を意識されることなく使われてしまう傾向があ

る。実際に、学生の中には冊子体の『広辞苑』を見てその厚さ、大きさに驚く者も少なくない。また、凡例や付録等を目にする機会も減少している。

- 上の3点と関連して、「辞書にはそれぞれ固有の性格があって、必ずしも大は小を兼ねない」（倉島 2002：106）という点が電子辞書では冊子媒体以上に認識されにくいこと、またたとえ認識されても選択の余地がほとんどないことを補足したい。

6. おわりに

今回の小調査から得られたことは以下のようにまとめられる。

- 辞書の所有、利用頻度は、辞書の種類と媒体によって大差がある。辞書選定に主体的に関わる機会が減少している。
- 電子辞書はその携帯性、簡便性からよく利用されているが、一覧性に乏しい点を指摘する意見もある。さらには電子辞書を引き慣れることによって起こる冊子媒体辞書の参照能力低下を危惧する意見もある。
- 誤字脱字の意識自体は2002年調査との間で大差はないが、予防のための対策を実施している人数が激減している。
- 自分の語彙量の多少については表現、発信時に実感されることが多いが、それを克服するために積極的に言語表現活動を行おうとする姿勢はほとんど見られない。

さらに、前章では国語辞典の観点から電子辞書についての留意点をいくつか指摘した。これらは電子辞書を批判するものではなく、現在重要なキーを握る電子辞書を言語意識、言語能力の向上に結びつけられるかどうかを模索したものである。残念ながら電子辞書の世界では国語辞典が主役として重要視されることはないが、電子辞書の携帯性、簡便性から以前よりも辞書が身近な存在になったことは調査結果から明らかである。この点に着目して国語辞典への意識と利用を促し、個々の言語能力の向上に結びつけさせることを考えたい。特に国語辞典を活用して発信的な言語活動に積極的に携わることによって、未知語や理解語彙を表現語彙に変え、それらを自在に操る表現能力を身につけさせる指導法を検討したい。

今後の調査においては電子辞書の所有の詳細、選定の基準、搭載辞書への意識、マニュアル等資料の参照などについても質問を行い、辞書利用の実態を出来る限り正確に把握する必要があるだろう。また意識調査だけでなく、たとえば多義語の語義の探し方、辞書情報の理解度などを調べる項目も追加したい。このような調査自体が、辞書の存在価値を再認識する機会となるような工夫も試みたいと考えている。

注

- 1) たとえば17年8月28日付産経新聞社説は、日本漢字能力検定協会が中学、高校、大学の各一年生、新卒社会人に対して実施した漢字能力調査の結果が「学年が上がるに連れて低くなる」ことをとりあげ、「国語力低下は既に各種調査で明らかにされており、もはや看過できないところにまで来ている」と述べている。
- 2) Jackson (1989: 206-7) の Exercises にあげられた‘Keep a diary of your dictionary use’を応用して適用した。
- 3) ひらがなを入力するだけで漢字を表示する機能だけを備えた電子辞書も、低価格で販売されている。

参考文献

- Hartmann, R.R.K. (ed) (1999a) *Dictionaries in Language Learning. Recommendations, Thematic reports from the TNP Sub-Project 9: Dictionaries.* Web site: <http://www.fu-berlin.de/elc/tnp1/SP9dossier.doc>
- (1999b) [Thematic Report 2] ‘Case Study: The Exeter University Survey of dictionary use.’ in Hartmann, R.R.K. (ed.) (1999a) 36-52.
- (2001) *Teaching and Researching Lexicography.* Harlow, England; New York: Longman.
- Howard, Jackson. (1988) *Words and their meaning,* London: Longman.
- 倉島節尚 (2002) 『辞書と日本語』 光文社
- 村田 年 (監修) (2005) 『電子辞書活用ハンドブック 2005』 カシオ教育研究所
- 沖森卓也 (1994) 「国語辞典を引くのはどのようなときか」 『語彙・辞書研究会第6回研究発表会』 資料集
- 大塚みさ (2002) 「学生の辞書利用の実態についての小調査」 『歌子』 第10号 実践女子短期大学日本語コミュニケーション学科 横1-26
- 関山賢治 (2005) 「電子辞書の最前線—どう選び、使い、教えるかー」 [新リレー連載 英語の辞書を考える①] 『英語教育』 4月号 大修館書店 50-51